

「カタギイテゴ」の作り方と分布と文化の地域性

川野 和昭

(本館 学芸専門員)

一 はじめに

「カタギイテゴ」とは、底部と胴部とが方形で、首部がくびれ、口部がラッパ状に広がった方形首括れ広口型魚籠である。投網漁や釜漁などで、腰に掛けて用いられる竹製籠の魚籠の一種である。その胴部と首部との間をつなぐ肩部の網み方が異なっているのが特徴で、「カタギイテゴ」という名称も、胴部からの網み方を肩の部分で一旦切るテゴ(籠)というところから命名されたものである。

このカタギイテゴは、鹿児島においては河川、浜、磯を問わずほぼ全域で使用され、漁撈関係の基本民具のひとつにあげられるものである。しかし、このカタギイテゴがそうした意味合いにおいて本格的に取りあげられたことはなかったといつてよい。たとえば、南九州の民具研究の基本文献である小野重朗著『南九州の民具』(慶友社・一九七二)でも残念ながらその記述はみられない¹⁾。また、鹿児島民具学会編『かごしまの民具』(慶友社・一九九二)においては、「コシテゴ」という項目で取りあげられているが、アユの引つ搔け漁のビクとしての機能的側面の記述のみに終わっているにすぎない。ただ、工藤員功著『日本人の生活と文

化6・暮らしの中の竹とわら』(ぎょうせい・一九八二)において、「鹿児島のカタキリはそのなかでも特に特徴のある形をしている。それが日本国内のほかではみられなくて台湾にはあるのである。(中略)なぜ日本の中ではほかの土地にでてこなくて、海をへだてて遠く離れたところにあるのだろうか、不思議としかいいようがない。(中略)ことによると、外国の他の地域にもカタキリやカルイカゴとよく似たものがあるかも知れない」とその分布の広がりを示唆している。

こうした中で、一九九五年二月、筆者が担当して開催した鹿児島県歴史資料センター黎明館企画特別展「鹿児島・竹の世界―環シナ海文化の視座から―」は、このカタギイテゴを鹿児島の基本民具として位置付け、その形態的、機能的な特徴や分布状態を本格的に取りあげたものである²⁾。その結果、このカタギイテゴは、北は九州山地から鹿児島、奄美、台湾、フィリピン、インドネシア、タイ、カンボジア、中国南部というように、沖永良部・与論、沖縄本島から八重山諸島を空白地帯としながらも、ほぼ環シナ海の分布を示し、形態、機能ともに酷似することが明らかになってきた。

本稿では、そのカタギイテゴの製作の技術を追いつながら、追加資料を含めてその形態的特徴の分類やその分布を検討してみたい。また、カタ

ギイテゴが沖繩に分布しないことを、どういふふうにかえたら良いのかについても考えてみたい。さらに、こうした検討をとおして南九州の地域文化の理解にとってこれらのピクのもつ意味をも明らかにしていきたい。

二 製作技術に関する伝承

1 技術の伝承者

先ず、今回カタギイテゴづくりの全工程を見せてもらった鹿児島県吹上町和田に仕事場を持つ下園充義氏のライフヒストリーを紹介してみたい。

下園氏は昭和二年吹上町に生まれた。竹細工との出会いは小学校時代の授業である。男子生徒は竹細工を、女子生徒は裁縫を習う授業があり、そこで平田という先生に竹細工を習ったという。

学校を終えて昭和一六年から昭和二二年まで曾於郡志布志町の和田醤油店で陸軍調達の醤油や味噌を作る仕事をしてきた。しかし、昭和二二年に医者に肺浸潤だと診断され、養生するために帰省した。

その後、竹細工の仕事を始めた。近所に住む四本誠という人を弟子に取り、六年から七年間、竹細工専業で仕事を続けた。

さらにその後、材木搬出用の索道のワイヤー張りの仕事と兼業で、昭和三四・五年ごろまで竹細工をやり続けた。その間作っていた竹細工製品は、コエジヨケ、コエテゴ、カタクツジヨケ、カライモアレジヨケ、ヨイジヨケ、コメアゲジヨケ、カタギイテゴ、バラ、トオシ、ガネテゴ、エンドウカゴなどである。

最初は吹上町湯の元の今村クニスケという仲買の人が注文を取ってきたものを作っておくと持って行って売り捌いてくれていた。昭和三〇年ごろからは加世田市の高倉竹細工屋も出入りするようになった。なかでもエンドウカゴは、吹上町の農協の注文で昭和二八年から三五年ごろまで年間三千個ぐらいつつ作った。本人と弟子の四本氏とがへぎを取り、近所の女の人たちを頼んで編んでもらった。

こうした兼業体制も昭和三四・五年ごろになるとプラスチックの生活道具がはやってきて竹細工の注文が減り、生計が立たなくなり索道の仕事専業になった。

しかし、昭和五五年ごろ索道の仕事の中に怪我をして仕事ができなくなり、再び竹細工の仕事を始めた。平成五年の大水害で家が流されるまで吹上町助代の自分の家で仕事を続けていたが、その後、現在の作業場で竹細工をやっていた榎木盛吉氏が、材料のカラタケ（またけ）百本ぐらいを購入したまま急死したため、その兄弟たちに強く要請されてそれを引き継いで現在に至っている。

以上が竹細工職人としての下園氏のライフヒストリーの概略である。

下園氏の特徴は、特別に師匠のもとに弟子入りして修業を積んで職人になったのではないということである。このことは、この南九州の地域では、竹細工という仕事で特別の修業をした人たちだけでなく極く普通の人たちの間にも行われていたということをよく物語っている。つまり、誰でもが竹を使ってテゴ（籠）やシヨケ（笊）を作るといふ文化的土壌があったことを如実に物語っているということである。さらに技術的な問題を言えば、大量のエンドウカゴを作るのに、編み方には女性を雇うが、へぎは下園氏自身で剥いだという伝承は、竹細工のもっとも大切な

技術が、竹を割り、へぎを剥ぐということであることをよく教えてくれている。

また、作っている製品の数も一〇種類を越えており、客の多様なニーズに十分に応えていたことがわかる。因に、下園氏の仕事場に残されている榎木盛吉氏の使用していたシャクダケ（尺竹……製品ごとにへぎの長さなどを記した竹の物差し）を見ると、コヒツバラ二尺・ケゴバラ・角モントオシ・カレカゴ大・茶ツミカゴ・松元茶カゴ・カタギリカゴ・ウナギボツポ立・ボツポ（長さ二尺二寸）・ウナギカゴマル・ウナギカゴ角・ガネテゴ大・エビ二口・キダカカゴ（シタ）・コミナトベカゴ・魚テゴ角下・コテゴ大・コテゴ中・コテゴ・ハマテゴ・ハマテゴ日置・貝カゴ大・ハマベントウカゴ・江口ベントウカゴ・チャワンメゴ・カイモノカゴなど三八本が残っており、そのことを証明している。しかし、そうした多様な需要も竹細工の製品を真似たプラスチック製品の出現によって激減していき、竹細工に生きる職人たちを追いつめていった。昭和三五年あたりを境に竹細工の仕事を手を捨てて生きざるを得なかった下園氏自身の人生は、日本が伝統的農村社会から近代的といわれる工業型社会へ大きく転換していく歴史の民俗的証言でもある。

次に、下園氏のカタギイテゴ作りの工程を追っていくことにしたい。

2 製作の工程

(1) 竹の選定

へぎ類は全てカラタケ（まだけ）を用いる。へぎにカラタケを用いるのは、モソダケに比べて粘り気があるからよいのだという。一方、口の

縁を仕上げるウチブチソトブチに用いる竹だけにモソダケ（孟宗竹）を用いる。モソダケは肉が厚く手間がかかるが、フチダケには厚みが必要なので適している。また、フチダケを巻くマキブチには、カラタケのウラオレダケ（末折れ竹）が好まれる。ウラオレダケは、正常に育った竹が巻いたときに割れてしまうのに対して、皮だけが柔らかくしなやかで弾力性があり、割れずによく巻ける。

竹細工に用いる竹は、節の盛り上がりが低くなければならない。これは、編んだときの面が平らで滑らかになるからである。そうした竹としては、この辺り（吹上町周辺）では、大鹿の部分林の竹が良い。

また、竹の切り時は、一〇月から一月ごろのものが、虫もつかず縮みも少ないので良い。七、八月の竹は、柔らかいので縮んでしまうから良くない。

(2) タチ（タチダケ）トイ（経竹取り）

タチとは、籠を編むときの経線を構成する竹のへぎである。山から伐り出してきたカラタケを、カタギイテゴ用の竹尺で長さを測り、横引き鋸で木口切りにする。節の部分にタケワリナタの刃を当て、竹を回転させながら節を削り落していく。次に、水に溶かした木灰でその竹の表面を磨く。さらに、「キモト タケウラ（木本 竹末……木は根本から、竹は末先の方から刃物を入れて割るものである）」と言って、タケワリナタを末の方の小口に当てて、手の掌でタケワリナタの背を叩いて反割りにしながら均等な幅に割っていく。幅は四分（約三mm）から四分五厘（約五mm）を目途に割っていく。左右に並べて編むタチを六本、前後に並べて編むタチを一本取り、一・〇mmの厚さに肉を剥ぎ取って皮の側を取っていく。



竹 割 り



タチヘギ剥ぎ

(3) ハバヒキ(幅引き)

タチの幅を一定に揃えるための作業である。ハバヒキ(平板の上に固定して立てた台)に柄のついていない小刀を一本打ち込み、それを基準にしてもう一本の小刀を打ち込んで幅を調整し、二本の小刀の刃の間にタチを通し、手前に引いてタチの両側を削り、幅を一定にする。

(4) メヅメ(目詰め)

底を四ツ目に編んだ時にできる空いた目(隙間)を埋めるための竹のヘギの名前であり、それを削り出す作業の名称でもある。メヅメのヘギには二種類ある。一つは、タチと同じく割った竹を、底の横幅の長さ(三三mm)に切り、幅、厚さともにタチと同じく削り出したヘギ。もう一つは、そのメヅメの三分の一の幅で、厚さ一・〇mmに削り出したヘギである。

(5) ソコガケ



ハバヒキ



メヅメの竹切り

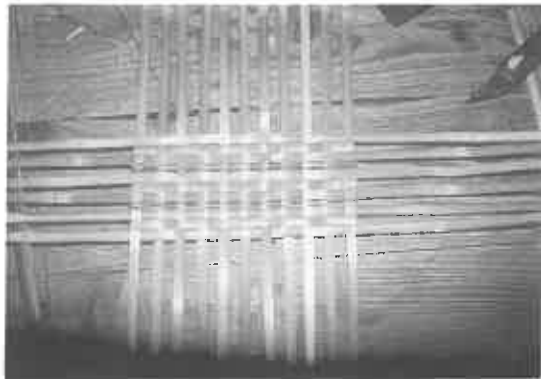
タチとメヅメを用いて底の平面を編む作業である。まず、タチ二本を皮の側を下にして経に並べ、その中央の位置に幅の広い方のメヅメを皮の側を上にして挟み、左足の指で抑えて固定する。次に、タチを一本取り、経に並べた二本のタチを持ち上げて、メヅメの中央の位置に皮の側を下にして、左右対称になるように緯に置く。次は、メヅメを持ち上げ、経に並べた二本のタチの上にタチ一本分の幅の隙間を空けて、向う側に編み込む。これを繰り返して六本編み込んだら反転させて、足で抑えていた手前の側に残りの五本のタチを編み込む。こうして、経の二本と緯の一本のタチとで底の部分の基本ができる。次に、一本のタチを経に、メヅメを挟んだ二本のタチを緯にして、二本のタチの外側をそれぞれ細かい方のメヅメのヘギで、ゴザ目編みの二回折り返しに編む。小刀の背で叩きながらの編み目を締める。次にその両側にタチを編み込み、さらに、その両側に幅の広いメヅメを一本ずつ、さらにまた、その両側に



ソコガケ 3 (メヅメのへぎで編む)



ソコガケ 1 (メヅメを挟む)



ソコガケ 4 (仕上がり)



ソコガケ 2 (緯へぎを編む)



X 状のチカラダケ

チカラダケは、底の外側に対角線にX状に差し込むへぎで、胴部を立ち上がらせて編むときに、底の方形の形をしつかりと固めて崩さないようにするため、底の傷みを防止する目的とを持ったへぎである。節を避けてヨ(節と節の間)の部分だけを用いて、底の対角線の長さに合わせてへぎを二本切りだし、タチと

(8) チカラダケ(力竹)

らである。

タチを一本ずつ編み込んで、底の部分が編み上がる。

(6) ヘットイ(へぎ取り)

胴部を編む緯へぎ作りの作業である。タチトイのときと同じように竹を割り、肉部を剥ぎ取り、ハバヒキをして、厚さ1・0mm、幅1・71二・0mmの細いヘツに仕上げる。

(7) ドウアミ(胴編み)

胴部の編み始めであるが、本格的な胴部の編みではなく、底のタチの編みが緩まないようにするためのものでもある。二本の緯へぎで、編み上がった底の部分の外側をゴザ目編みで一周編む。タチが偶数であるので、底の対角点から二本のヘツでそれぞれを追い回す要領で編み始める。

タチが奇数だと一本のヘツでゴザ目編みに追い回しても、同じタチを通るヘツの潜りと越しとが一周ごとに交互になるが、偶数だと同じタチの所では、潜りなら潜り、越しなら越しとなり、ゴザ目編みにならないからである。

同じ幅に削り出し、先端部分をそれぞれ尖らせて差し込む。

(9) ドウアミ



ドウアミ 1 (タチを押さえる)



ドウアミ 3 (ヨコヘギを編む)



ドウアミ 2 (回転させる)



ドウアミ 4 (編みあがり)

チカラダケを差し込んだらよいよ胴部の編みに移る。皮の側を外側にして、底の部分を腹に当てて、胡坐をかいた膝の上に乗せて抱くようにする。両腕で抑えるようにしながら、一面を編んでは回転させて次の面に移っていくという要領で編んでいく。編み方はゴザ目編みである。左右の面は、上に向かっていくにしたがってやや広げるように編み上げていく。底から一二・五mmの高さの所まで続けて編み上げていき、ここでいったんゴザ目編みを途切れさせて、編み方を変化させて、両肩の部分を編み上げていく。

(10) カタアミ (肩編み)

左右のタチ五本を、腹(前面)、背(後面)ともに横に寝かせるようにして菱四つ目に折り込んでいく。最初に左側の肩から編みに掛かる。先ず、テゴを縦長の方向にして両膝で挟み固定する。向かって左側の一番手前のタチを右側に向けて折り曲げ、右側の二番目のタチを越し、三番



カタアミ 1 (タチをヨコに曲げる)

目のタチを潜らせ、四番目のタチを越してテゴの内側に折り込む。

次に、向かって右側のタチを左側に折り曲げ、左側の二番目のタチを潜らせ、三番目のタチを越させ、四番目のタチを潜らせてテゴの内側に押し込んでいく。

それが終わると、折り曲げた両方のタチの根本の隙間に肩の稜線をなすタチにする新たなタチを押し込む。続いて、向かって左側の二番目のタ



カタアミ 3 (菱し四つ目に編む)

左側の肩が編み上がったたらテゴを反転させて同じ要領で一方側の肩を編んでいく。

次に、テゴの腹と背のタチだけが残っている中央部分の隙間に、メヅメを施していく。タチの幅と厚さのメヅメ(ヘギ)を一本と、幅二三・〇cmの広さに竹を割り、鑿のみを使って肉を削り取り薄い皮目だけのメヅメを二枚作る。タチと同じメヅメは、



カタアミ 2 (肩の稜線を足す)

チを右が側に折り曲げ、右側の二番目のタチを越させて、その上を抑えるように肩の稜線をなすタチを重ねて折り曲げる。

次に、向かって右側の二番目のタチを左側に折り曲げ、肩の稜線をなすタチの上を抑えて、左側の三番目のタチを潜らせ、四番目のタチを越させて、テゴの内側にタチの先端を挿し込んでいく。この編み方を繰り返しながら、左右ともに五本目のタチまで編み込んでいく。さらに、形が広がらないように底から肩にかけて紐を掛けて形を整える。

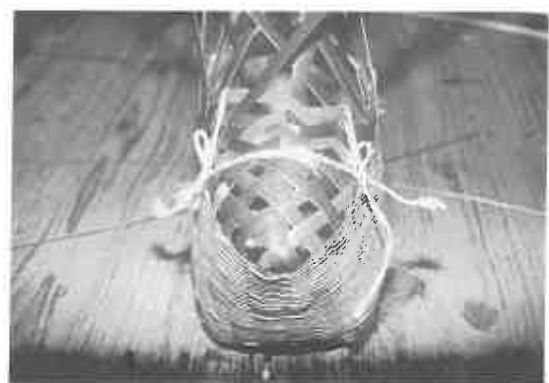


メヅメ 1

肩を編んだ残りの一六本のタチ(底から立ち上がってきたタチ四本、肩の稜線に添えたタチ二本)と胴部を編んだヘツとを用いて編んでいく。まず、二本のヘツで首の付け根を四周編み上げる。その次に、

(11)クビアミ(首編み)

首の部分の編みに移っていく。



カタアミ 4 (編みあがり)

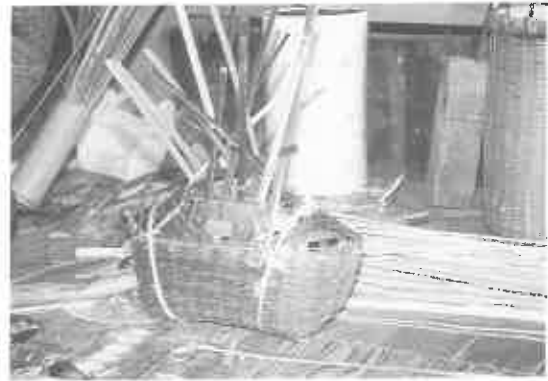
タチ九本にわたる長さ、幅広の一枚のメヅメは、タチ七本にわたる長さに切る。もう一枚は、九枚にわたる長さに切る。最初に、幅広の短いメヅメを真中のタチの上を越させて、その両側のタチを潜らせ、両端をテゴの内側に挿し込む。もう一枚の幅広のメヅメは、その上側に真中のタチの下を潜らせ、その両側のタチを越させ、その次のタチを潜らせて、両端をテゴの内側に挿し込む。最後に、タチと同じメヅメを、真中のタチの下を越させ、その両側のタチを潜らせ、その次のタチを越させて、両端をテゴの内側に挿し込む。両手の指でメヅメの隙間を締める。次に



クビアミ 1 (極細ヘギで編む)

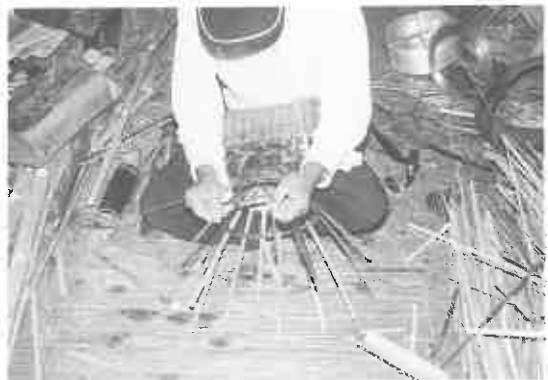


クビアミ 2 (輪で口を広げて編む)



メ ツ メ 2 (編みあがり)

六本のタチの間に竹の輪を入れて、口の大きさに合うところまで押し下げてタチを広げ、その輪を細紐で固定する。さらに、タチとタチとの間が四mm(一寸二分)位の広さになる所まで編み上げて、全部のタチを二本に割っていく。このうち左右の脇のそれぞれ三本のタチは、二本に割いたうちの一本を折り捨てる。残った二六本のタチの間隔が等間隔になるように広げて、はめてある竹の輪



クビアミ 3 (タチヘギを2分する)



クビアミ 4 (編みあがり)

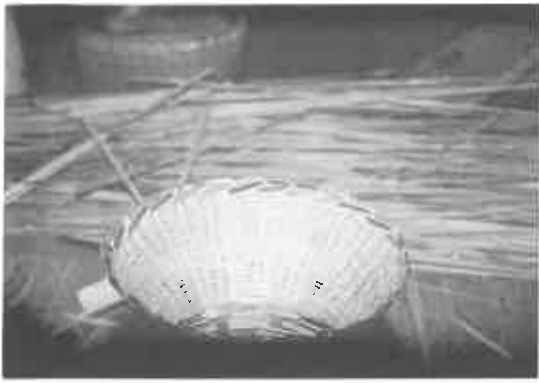
の高さまでヘツで編み上げていく。

(12) フチシアゲ (縁仕上げ)

フチシアゲは、先ず、タチだけで共縁に仕上げ、さらに、その上を巻き縁に仕上げていく。

① トモフチシアゲ

残った二六本のタチを五・〇mm幅になるように割り、余分な部分は捨てる。さらに、タチの肉の部分の皮を剥いで薄くして、捻じり曲げて折れないようにする。次に、タチを捻じって皮がテゴの内側になるようにして左回りに曲げて、次の次のタチを少し過ぎた長さの所から先を折り捨てる。そのタチを次のタチの外側を越して、次のタチの内側に編み込む。次のタチを同じように捻じり曲げて編み込むと、前に編み込んだタチを上から抑える形になる。この要領で左巻きにすべてタチを編み込んで一周すると縁が仕がる。



フチアミ 3 (仕上がり)

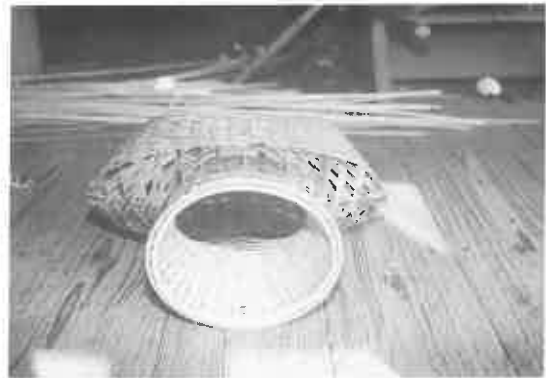
② マキブチシアゲ
次に、トモブチシアゲした縁の内側と外側とに竹の輪を当てて挟み、さらにそれをマキブチで巻き締めて仕上げる。内側に当てる竹の輪をウチブチといい、孟宗竹の肉の部分厚めに作る。薄くするとマキブチで巻いた時にびったりと巻き締めることがでず隙間ができるからである。縁の内側にあわせて大きさを決めるが、接合部は一枚分の厚さになるように削って調整した後針金で縛る。外側の輪をソトブチといい、皮目の



フチアミ 1 (捻り曲げて編み込む)



フチアミ 2 (次々編み込む)



マキブチ 1 (ウチブチとソトブチ)

竹を用いウチブチよりも薄くする。先に縁の外側にソトブチを当て、その後縁の内側にウチブチを押し込む。この方法は、バラの縁仕上げの時のフンコン(踏み込み)という方法と同じである。

それが終わると、ウチブチとソトブチとを巻き締めるためのマキブチを一本作る。マキブチは、口の左右の幅の二・二倍の長さに取り、幅は五分(約一七mm)位にし、厚さは皮目を残し薄く剥ぐ。先述したように、マキブチには、カラタケのウラオレダケ(末折れ竹……末が折れたまま成長した竹)を用いる。ウラオレダケは、正常に育った竹が巻いたときに割れてしまうのに対して、皮だけが柔らかくしなやかで弾力性がありよく巻けるからである。

巻き方は、三回巻きで仕上げる。マキブチの一端を尖らせて、皮目を下にしてテゴの外側から差し込み、右回りにウチブチとソトブチとを巻いて、三本先のタチの所に外側から差し込んで、きつく締めずに余裕を持たせて巻く。これを繰り返しながら一周巻いていく。一周巻き終わったら、差し込んできた先端部分を少し残して、巻いてきた方向と逆の方向にきつく巻き締めていく。次に、もう一方の端を尖らせて、一回目に巻いたマキブチの前側に巻きつけていく形で、左回りにきつく巻き締めていく。三回目も同様に巻き締めていくが、ウチブチの側はマキブチが二回目に巻いたマキブチと重なってしまうので、一回目のマキブチの



マキブチ 4 (二巻き目)



マキブチ 2 (一巻き目)



マキブチ 5 (仕上がり)



マキブチ 3 (逆締め)



メヅメ 1 (外側から内側へ)



メヅメ 2 (仕上がり)

(14) カスガイ

底の回りの縁の部分が傷むのを防ぐために補強するへぎである。先ず、

下を潜らせて巻き締めていく。最後の端は、いったん捻じって外側から内側に差し込んで、残りは切り捨てる。これで、ほぼ全体の形が仕上がったことになる。後は、肩の部分のメヅメと底の補強の作業が残る。

(13) メヅメ

肩の部分の菱四つ目の隙間を埋めていく作業である。肩の稜線のタチを挟むように両側にそれぞれ三本のメヅメのへぎを差し込んでいく。そのうち二本ずつは、肩の突端から首の付け根に向けてタチの間に差し込み、一方の端をテゴの内側に差し込む。もう一本は、胴部から首部に伸びている真中のタチの脇のタチを潜らせ、さらに次のタチを越させるというふうに、胴部のゴザ目編みの縁に沿って次々通していく。手元に残ったへぎは、初めに差し込んだタチの所で切り取る。



カスガイ 1 (横長の縁に当てる)



カスガイ 2 (仕上がり)

長い方の横の縁にそれぞれ薄く剥いだ皮目のカスガイを当てる。両端を尖らせ、差し込みやすくするためにさらに薄く削り、曲がる部分は内側の肉を薄く削り取り、片方をテゴの角に差し込み、底の真中のタチを潜らせ、一方の角に差し込む。次に、短い方の縦の縁に厚めのへぎを当てる。先の長い方のカスガイを抑える形で両端を差し込んで仕上げる。以上で外観は全て仕上がったことになるが、最後に、テゴの内側に飛び出しているへぎを切り揃えて出来上がりとなる。

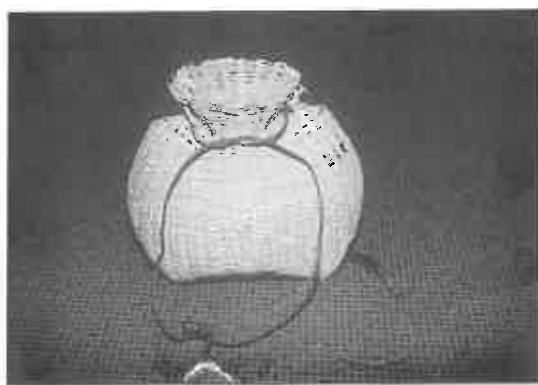
次に、こうしたカタギイテゴつまり方形首括れ広口型の魚籠の事例を、南九州を中心とした日本及び環中国海周辺域にわたって取りあげ、その形態と機能を検討してみたい。

三 方形首括れ広口型魚籠(カタギイテゴ)の形態と機能

1 日本及び南九州の事例

(1) ビク 佐賀県東与加町(長崎県立美術館蔵)

東与加町は、有明海の北の一番奥に位置するところである。このビクは底は四つ目編みで編み、メツメを施し、X状のチカラダケを掛けてソコガケしている。胴部をゴザ目編みで肩の所まで編み上げ、肩部は両端の



四本のタチへぎを横に折り曲げて二つ越し二つ潜り編代透かし編みに編みである。しかし、肩の稜線が首の付け根に向かつて水平になっており、しかも胴部の中央の三本のタチへぎの部分は、ゴザ目編みが途切れずに首の部分へと続いているのが特徴である。首の付け根は絞られて括れ、口はゴザ目編みで編み上げられ、楕円形でラツバ状態の広口に開いている。胴部は、方形の底から立ち上りながらも丸みを帯びて、

丸形首括れ広口型魚籠に近い形をしている。首の付け根には紐が巻かれ、その両端はそれぞれ離れており、腰に結ぶものであると思われる。全体の高さが二八五・〇mmである。

(2) シタミカゴ 宮崎県東臼杵郡北川町内名(宮崎県総合博物館蔵)

北川町は、大分県境に近い山間部に位置する。このシタミカゴは、マダケを用いて作られている。底部を方形に成形し、胴部も引き続いて方形に立ち上がらせて、ゴザ目編みで肩の所まで編み上げ、肩の両端四本のタチへぎを横に折り曲げて菱四つ目編みに編みである。しかし、その

タチヘギを横に折り曲げるところは、編み上げてきたヨコヘギの最終線よりもやや高い点であり、しかも、肩の稜線にあたる部分が水平になっているのが特徴である。首の付け根は絞られて括れ、首の部分は、タチヘギを二つ割にして広げ、ゴザ目編みで編み上げられ、口は楕円形でラツパ状態に開いている。また、肩の両端に立ち上がる左右のタチヘギを上開き状態に編み上げ、腹（前）と背（後）は逆にタチヘギが上にいくに従って狭められ気味に編み上げてある。口の縁は巻き縁仕上げになっている。昭和三〇年代に作られ、昭和四〇年代まで使用されていた。川漁に用いられアユ、イダ、ハエなどを入れたもので、首が括れているのは、中に入れた魚が外に出ないようにしたものである。大きさは、全高二七〇・〇mm、肩の高さ二〇〇mm、胴部の横幅二六〇・mm、胴部の縦幅一一〇・〇mmの横径一三三・〇mmである。

(3) イオメゴ 宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町鞍岡(宮崎県総合博物館蔵)
五ヶ瀬町は、九州中央山地の真中にあり、日本列島最南端のスキー場のあることで知られる山の町である。このイオメゴ(魚目籠)も北川町のシタミカゴとほぼ同じ形を持つているが、肩の稜線が首の付け根に向かって肩上がりになっていることと、口の開きが胴部の大きさに比べて大きくなっているのが異なる点である。肩の菱四つ目の部分はメヅメが施されずに空いたままになっている。川漁に用いられ、腰に結いつけて取れたイダ、ハエなどを入れる魚籠で、首が括れているのは入れた魚を出にくくするためである。各部の大きさは、全高二七〇・〇mm、肩の高さ二〇〇・〇mm、胴部の横幅二五〇・〇mm、口の横径一五五・〇mmである。

(4) ウテゴ 宮崎県西臼杵郡椎葉村尾前
椎葉村は五ヶ瀬町とは国見峠を境に南側に位置し、正しく九州の臍と



いわれる山国で、柳田國男の『後狩詞記』で知られる。尾前は、椎葉ダムの上流に位置し、溪流でのエノハ(ヤマメ)釣りの盛んな所である。このウテゴは、昭和四〇年ごろにマダケで作られたもので、三二本のタチヘギ全てとヨコヘギには磨きが掛けられており、全体が光沢を持った鉛色をしている。底には並行に二本のチカラダケが入られて、引き続いて方形に胴部が立ち上り、肩の始まるころまでゴザ目編みで編み上げられている。左右の側面のタチヘギは上開きになるようにし、腹と背のタチヘギは途中でやや膨らましてやがて狭め気味になるように、ヨコヘギで調整しながら編み上げである。左右両端のタチヘギは折り曲げてそのまま肩の稜線とし、その脇のそれぞれ五本のタチヘギを折り曲げて、四つ目編みで肩を首の付け根に向かって肩なりに編んである。菱四つ目には、隙間を埋めるメヅメが施されている。首部は、肩の稜線として立ち上がってきた二本のタチヘギと、胴部に残ったタチヘギ一〇本とをそれぞれ二本ずつに割いて、上開きにラツパ状の広口に編み上げである。縁は、巻き縁で仕上げられている。肩の縁にも巻き扶持の縁輪が取り付けられて、それに腰紐が付けられている。このウテゴは、ヤマメなどの溪流釣りのとき腰に結いつけ、釣れた魚を入れるもので、胴が四角であるので腰にぴったりと付いてコロコロすることがないので、中に入れた魚が傷まないという。また、口が広く開き、首が括れている

ので魚を入れ易く、入れた魚が外に出にくいという。大きさは、全高二六五・〇mm、首の付け根の高さ二一〇・〇mm、肩の高さ一四五・〇mm、肩の横幅二五五・〇mm、胴部の横幅二三二・〇mm、首の付け根の横幅八三・〇mm、底部の縦幅一一〇・〇mm、胴部の最大縦幅二二二・〇mm、肩の最大縦幅一一三・〇mm、首の付け根の横幅八〇・〇mm、口の横径二三三・〇mm、口の縦径一一三・〇mmである。

(5) ビク 宮崎県小林市東方 (宮崎県総合博物館蔵)

小林市は、江戸時代には旧鹿兒島藩に属し、藩の政策で西目(薩摩半島側)からの移住者が多くみられる地域である。市内を大淀川の支流岩瀬川に流れ込む大小の川が流れており、河川漁撈も盛んなところで、このビクも川漁で使用されたものである。四角の底から胴部が方形に立ち上がり、左右両側は上開き、腹と背は狭め気味にゴザ目編みで編み上げである。肩の所でゴザ目編みが途切れ、肩部は両脇四本のタチヘギを折り曲げ菱四つ目に編んでメヅメが施してある。肩の稜線は首の付け根に向かつて上がっており、首は再びゴザ目編みでラツパ状に広口に編まれている。縁は巻き縁で仕上げられている。腰紐は麻製で、首の付け根を二重に巻き、背の方から底を潜らせ腹から首の付け根の紐の輪で止めて、腰に結ぶ分を出してある。マダケ製で、昭和三〇年代に作られ、昭和五二年まで使用されていた。ヤマメ、イダ、ハエなどを入れた。全高二八〇・〇mm、首の付け根の高さ一八〇・〇mm、胴部の横幅二四五・〇mm、胴部の縦幅一三四・〇mm、口の横径一三八・〇mmである。

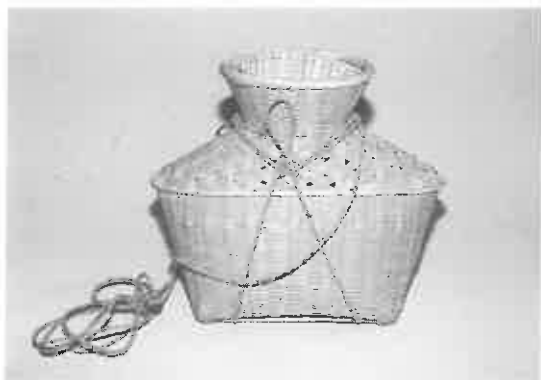
(6) サカナカゴ 宮崎県北諸県郡三股町長田 (宮崎県総合博物館蔵)

三股町は、都城市の東に隣接する町で、大淀川の支流が、背後の日南の山間から流れ込んでいる所である。材料はマダケを用いており、製作

の技術も小林市のビクと基本的には同じである。しかし、底の横幅と肩の両端の幅との開きが九〇・〇mmと大きい点と、首がほぼ筒状に立ち上がり、口がラツパ状になっていないのが最大の違いである。従って、厳密には方形首括れ広口型とは言いがたく、「方形首括れ筒口型」とでも言うのが適当な魚籠であるが、一応亜種として範疇に入れて取り上げておきたい。全高二九二・〇mm、首の付け根の高さ一九二・〇mm、肩の横幅三三〇・〇mm、胴部の横幅二四〇・〇mm、胴部の縦幅二二八・〇mm、口の横径一三七・〇mmである。

(7) カタギイテゴ 鹿兒島県薩摩郡宮之城町屋地 (黎明館蔵)

宮之城町屋地は、川内川の中流域に位置し、アバと呼ばれる大掛かりな釜漁からビビ、サカタゴなどの単体の釜漁、網漁、釣漁、潜り漁など多様な河川漁撈の見られる地域である。魚種も豊富でアユ、イダ、コイ、ギシ、ウナギ、ヤマタロガネ(もくずかに)、ダツマ(てながえび)



などが取れる。このカタギイテゴは、宮之城町木浜に住んでいた中島良男という釜作りの名人が、昭和五〇年代初めに作ったものである。ヘギはタチ、ヨコともに全て磨きが掛けられており、全体が鉛色の光沢を持っている。四角に底掛けしX状にチカラダケを入れて、引き続いて三二本のタチヘギを立ち上げ、肩の両端に向け両端のタチヘギを上開き気味にして、腹と背のタチヘギは狭め気味

にゴザ目編みで編み上げてある。左右両端二本のタチヘギは肩の稜線として折り曲げ、その脇のそれぞれ五本のタチヘギを折り曲げて菱四つ目に編んで、首の付け根に向かって斜めに上がるように肩を作っている。首は、肩の稜線のタチヘギ二本と腹と背に残った一〇本のタチヘギをそれぞれ二つ割りにして、ゴザ目編みでラップ状の広口に成形し、巻き縁仕上げにしてある。口には釜のカエシと同じ蓋がはめ込まれている。

また、肩の縁には巻き縁の縁輪が付けられ、菱四つ目には隙間のないほどにメヅメが差し込まれている。底の縁には四方に傷みを防ぐためカスガイが施され補強されている。腰紐は、紐を首の付け根に巻き、その背の側に別の紐結び、両端をテゴの底を通して腹の側に回し、首の付け根の紐に掛けてある。胴部が方形であるので、腰に付けた時にびつたりと付いてコロコロしない。川漁に用い、サカタゴやエビテゴなどと呼ばれる釜で取ったタツマを入れる。肩が斜めになっているのでタツマは這い上がれないし、カエシの蓋が付いているので外に出ることができないという。全高三四〇・〇mm、肩の端の高さ一八四・〇mm、首の付け根の高さ二三五・〇mm、胴部の横幅三四〇・〇mm、肩の横幅三七〇・〇mm、首の付け根の横幅一二三・〇mm、口の横径一三七・〇mm、胴部の縦幅一二八・〇mm、首の付け根の縦幅九五・〇mm、口の縦径一二六・〇mmである。

(8) カタフツテゴ 鹿児島県薩摩郡東郷町山田(黎明館蔵)

東郷町は、川内川にそって宮之城町の下流に隣接する町である。このカタフツテゴも肩でゴザ目編みが途切れ、首が括れて広口になっているなど基本的には作りが同じである。しかし、肩の作り方が異なっている。胴部をゴザ目編みで編み上げてきて、肩の稜線にするタチヘギを新たに一本ずつ両端に差し加えて、両脇五本ずつのタチヘギとともに、ゴザ目



イが施されている。蓋は付いていない。腰に付けて川に行き、取れた魚を入れるのに用いる。全高三〇〇・〇mm、肩の端の高さ・首の付け根の高さ二三三・〇mm、胴部の横幅二五〇・〇mm、肩の横幅二七六・〇mm、首の付け根の横幅九〇・〇mm、口の横径一四〇・〇mm、胴部の縦幅一〇八・〇mm、首の付け根の縦幅一一・〇mm、口の縦径一三八・〇mmである。

(9) ウナギカゴ 鹿児島市下福元町(黎明館蔵)

鹿児島市下福元町は、鹿児島湾に面したところである。二枚一組のタチヘギ二六組で作られている。このウナギカゴには、大きな特徴が二点ある。一つは、底の横幅に対して、肩の横幅が一五mmも開いており、底から肩への開きが極端に大きくなっていることである。もう一つの特徴は、首部がラップ状に開かず円筒形に立ち上がっていることである。先に示した宮崎県北諸県郡三股町の「方形首括れ筒口型」とほぼ同一の形である。肩の稜線は底から立ち上がってきた両端のタチヘギを折り曲

編みの最終の線から二〇mmぐらい高い位置で折り曲げて菱四つ目に編んで肩を成形してあるが、肩の稜線が斜めに上がりず水平になっているのが大きな特徴である。菱四つ目にはメヅメが施されている。また、広口の縁は、ウチブチとソトブチを当てて野田口仕上げに仕上げている。材料にはマダケを用い、タチヘギは合計二六本、底には横長方向にメヅメがあり、X状のチカラダケにカスガイ



げて、首の付け根に向かつて斜めに上がっている。肩の部分は、脇の四本のタチヘギを折り曲げて菱四つ目に編み、隙間のないようにメヅメが施されている。首は、腹と背に残った八本のタチヘギと肩の稜線の二本のタチヘギとを、真つ直ぐに立ててゴザ目編みで編み上げ、口は巻き縁仕上げにしてある。底にはソコガケの周囲に極細の締め編みが見られ、縦方向にメヅメも施されている。また、チカラダケがX状には

められているが、カスガイは当てられていない。腰紐は、一本のシユロ縄を背の側から首を回して腹に掛け、両端を底に通し背を回す。さらに、先に首に回した縄の下を潜らせて腹の方に回して首の付け根で結びあわせてある。テゴの名称が示すとおり、ウナギ釣りに用いられたもので、無蓋であるので獲物のウナギが外に逃げ出しそうに思われるが、それを防いでいるのがおそらく首が括れるように斜めに編み上げた肩と円筒形の首の作りであると思われる。全高三一〇・〇mm、肩の高さ一七五・〇mm、首の付け根の高さ二〇五・〇mm、胴部の横幅二六五・〇mm、肩の横幅三八〇・〇mm、首の付け根の横幅一一二・〇mm、口の横幅一一二・〇mm、胴部の縦幅一五五・〇mm、首の付け根の縦幅一〇〇・〇mm、口の縦径一〇三・〇mmである。

(10) ウテグ 鹿児島県大島郡喜界町赤連(黎明館蔵)

喜界町は奄美大島の東に浮かぶ喜界島にあり、周囲を珊瑚礁に囲まれ

ている。このウテグも珊瑚礁の環礁内の漁に使われたものである。材料はシマダケ(ほうらいちく)を用いており、二枚を一組にした三八本のタチヘギと細いヨコヘギとで編み上げている。肩の稜線に当てるタチヘギに両脇の三本を折り曲げて用いているのが特徴で、その脇の四本のタチヘギを折り曲げて、肩の部分を斜め上に菱四つ目に編み上げている。菱四つ目の隙間にはヨコヘギを用いてメヅメが施されている。口も広口になっており、矢筈巻きで仕上げである。また、首の付け根の回りに四つのミミが付けられ、腰にゆわえる紐を通すようにしてあるのも特徴で、この地域の背負い籠であるテルの作り方の技術が用いられている。全高三五〇・〇mm、肩の端の高さ二〇四・〇mm、首の付け根の高さ二六七・〇mm、胴部の横幅二六五・〇mm、肩の横幅三五〇・〇mm、首の付け根の横幅一八〇・〇mm、口の横幅一一〇・〇mm、胴部の縦幅一七八・〇mm、首の付け根の縦幅二二〇・〇mm、口の縦径二三八・〇mmである。

(11) イビラク 鹿児島県大島郡住用村山間

住用村山間は、外洋から深く入り込んだ住用湾に面した集落である。集落の中央を山間川が流れており、モクズカニを対象としたア

ネクと呼ばれる釜を用いた川漁も行われている。このイビラクは、四角にソコガケし、胴部を立ち上げている点は他の物と同じで、首も括れて広口になっているのもほぼ同じである。しかし、肩の部分の作りが大きく違



小野重朗氏撮影 (S.43.10)

う。肩に稜線にあたる傾斜がほとんど見られず、両脇の部分の三本ぐら
いずつのタチヘギを折り曲げ、横に編んだ肩が若干見られるだけである。
その部分以外は胴部から口までゴザ目編みで編み上げられている。肩の
高さの位置にミミが四個付けられて紐が通してある。口の縁は、タガの
縁輪にオセブチ（押え縁）を当てて、野田口仕上げになっている。漁に
するとき腰に提げて行き、取れた魚をいれるのに用いる。全高四〇五・
〇mm、口の横幅二三〇・〇mm、口の縦幅二一〇・〇mmである。

(12) アギウベラク 鹿児島県大島郡徳之島町母間⁽⁶⁾

徳之島町母間は、太平洋に面した集落で、前面には豊かな珊瑚礁の環
礁が広がり、その中ではイザリ漁が行われている。このアギウベラクも
先の住用村のイビラクと同じ系統である。肩の部分の稜線の張りが小さ
くできているのが特徴である。四角の底から方形に胴部が立ち上がり、
ゴザ目編みで肩の線まで編み上げ一旦途切れる。肩は胴部の両脇の四本
のタチヘギを横に折り曲げて菱四つ目編みで編みである。アギウベラク
という名前も、その編み目の形が魚のえら（アギ）に似ているところか
ら名付けられた名称である。首の部分は再びゴザ目編みとなり、括れは



(S.44.7) 影撮氏知子村

それほど大きくなく、口もやや
広口になっている程度である。
口の縁は、タガの輪を当てオセ
ブチで押えて野田口仕上げにし
てある。首の付け根には紐を通
すミミが四個付けられている。
寸法は不詳。

以上が南九州から奄美にかけ

ての地域に分布する代表的なカタギイテゴ、つまり方形首括れ広口型魚
籠である。次に、台湾から東南アジアをふくめて、中国海を取り巻く地
域に分布する事例を取りあげてみたい。

2 環中国海周辺の事例

(13) 漁具 中華民国台湾省台東県東河村(国立民族学博物館⁽⁷⁾)

底は四つ目で編み、X状のチカラダケを当てて四角にソコガケし、胴
部を方形に立ち上がらせている。底の横幅に対して片の横幅が若干広
く
なっているが、それほど極端な開きはない。胴部の編みは、捻り編みと
ゴザ目編みとの繰り返しであるが、最初の立ち上がりに一・〇mm幅のヨ
コヘギを捻り編みにし、次に二・〇mm幅のヨコヘギを用いてゴザ編みで
編んでいる。この編み方をもう一回繰り返す、最後を一・〇mmのヘギで
肩の線まで捻り編みで編み上げている。肩は、稜線にあたるタチヘギは
無く、両脇四本のタチヘギを横に折り曲げて、菱四つ目で首の付け根に
向かって斜めに編み上げてある。首部は、一・〇mmのヨコヘギで、ほぼ
楕円形の筒型に捻り編みで編みであり、ラッパ状の広口になっていない
のが特徴である。肩の回りにはメヅメはされておらず隙間が空いたまま
である。底にはメヅメがなされ、カスガイも施されている。アミ族が使
用した魚籠である。全高一七〇・〇mm、肩の端の高さ九五・〇mm、首の
付け根の高さ一四〇・〇mm、底部の横幅一八五・〇mm、肩の横幅一九〇・
〇mm、口の横幅二一五・〇mm、底部の縦幅四〇mm、口の縦径九五・〇mm
である。

(14) 竹製かご 中華民国台湾省花蓮県萬榮郷萬榮村(国立民族学博

物館蔵)

底から首の付け根まで二つ越し二つ潜りの網代編みで編み上げられている。首部はゴザ目編みでラツパ状に広口に編み上げている。底から肩の両端にかけては上開き、腹と背の方は底から首の付け根にかけてやや狭め気味に編んである。肩は、両側それぞれ五本のタチヘギを折り曲げて二つ越し二つ潜りの網代編みで、首の付け根に向かって斜めに編んでいる。アタヤル族が使用していたものである。全高一八〇・〇mm、肩の端の高さ八〇・〇mm、首の付け根の高さ一三五・〇mm、底部の横幅一五〇・〇mm、肩の横幅一九五・〇mm、口の横幅一五〇・〇mm、底部の縦幅九五〇・〇mm、口の縦径一四〇・〇mmである。

(15) 魚籠 中華人民共和国海南省瓊中県 (国立民族学博物館蔵)

底にX状にチカラダケを入れて四つ目編みで四角にソコガケして、ゴザ目編みで方形に胴部を立ち上げている。底から肩の両端にかけては大きく上開きに、腹と背の方は底から首の付け根にかけてやや狭め気味に編んである。肩は、二枚のヘギを合わせて一本にした両側それぞれのタチヘギ三本を横に折り曲げ菱四つ目編みで、首の付け根に向けて斜めに編み上げている。腹と背の側は、ほぼ四つ目になっている。肩の稜線にあたる部分には新たなタチヘギが上から当てられ、ビニール紐で結びつけられている。首は再びゴザ目編みで、ラツパ状に広口に編み上げられ、口の内側には釜のカエシと同じ作りの蓋が付いている。海



南島の黎族が腰に提げて使っていた魚籠である。全高三一〇・〇mm、肩の端の高さ一六〇・〇mm、首の付け根の高さ二二〇・〇mm、底部の横幅一九〇・〇mm、肩の横幅三〇〇・〇mm、口の横幅一五〇・〇mm、底部の縦幅一一〇・〇mm、口の縦径一〇〇・〇mmである。

(16) 魚籠 中華人民共和国湖北省当陽県 (国立民族学博物館蔵)

底を四角に四つ目編みでソコガケし、二枚一組のタチヘギ二六本を立ち上げ、二つ越し二つ潜りの網代編みで肩の高さまで、両脇を上開きに編み上げている。さらに、両脇の四本ずつのタチヘギを横に折り曲げ、二つ越し二つ潜りの網代編みで、首の付け根に向けて斜めに編み上げている。首はゴザ目編みでラツパ状に広口に編み上げていくが、首の部分にかかると二枚一組だったタチヘギを一枚ずつに分けて広げて編んである。口の縁は、ウチブチとソトブチとを当てて、オセブチで押えて、野田口仕上げで仕上げている。首の付け根に紐紐が巻きつけてある。蓋は、口の大きさの円い板に竹の筒が付けられ、中に入れた魚が出れないようにしてある。漢族が鵜飼いの漁で使用したもので、取れた魚を入れた魚籠である。周辺ではあまり見られないものであるという。全高三〇〇・〇mm、肩の端の高さ九〇mm、首の付け根の高さ二一〇・〇mm、底部の横幅二二〇・〇mm、肩の横幅三四〇・〇mm、口の横幅二二〇・〇mm、底部の縦幅一五〇・〇mm、口の縦径一八〇・〇mmである。

(17) 魚籠 中華人民共和国広西壮族自治区靖西市 (国立民族学博物館蔵)

底は、長方形に四つ目編みに編み、メヅメを施してソコガケし、一八本のタチヘギを立ち上がらせ、両側を上開きに、腹と背の側をやや狭め気味にゴザ目編みで肩の高さまで編み上げている。肩は、両側のそれぞれ二本のタチヘギを折り曲げ稜線とし、その脇のそれぞれ二本ずつのタ

チヘギを横に折り曲げ、メヅメをした菱四つ目編みで首の付け根に向けて斜めに編み上げていく。このとき、首部のタチヘギとして立ち上がるタチヘギは、一本を二つに割いて本数を二倍にする。蓋は付いていない。首部は、最初の五周を捻り編みし、その上をゴザ目編みでラツパ状に広口に編み上げてある。肩の部分は大きな隙間が一杯できるので、タチヘギと同じ幅のヘギでメヅメを施してある。壮族が淡水魚の漁に使用していた魚籠である。全高二四〇・〇mm、肩の端の高さ一一〇・〇mm、首の付け根の高さ一七〇・〇mm、底部の横幅一二五・〇mm、肩の横幅二四〇・〇mm、口の直径一五〇・〇mm、底部の縦幅七〇・〇mm、口の縦径一三五・〇mmである。

(18) 魚籠 中華人民共和国広西壮族自治区金秀県(国立民族学博物館蔵)

底は、二六本と一三本のヘギを用いて、二つ越し二つ潜りの網代透かし編みで長方形にソコガケし、四隅からそれぞれ一本ずつ底の中央部に向けてヘギを差し込んで加え、底の周囲を極細のヘギで四周締めるようにして、二つ越し二つ潜りの網代編みで編みである。さらに、X状にチカラダケを施し、合計八四本のタチヘギを立ち上げさせ、二つ越し二つ潜りの網代編みで胴部を編む。左右両側は、肩の両端に向け上開きに、腹と背の側は、中央ぐらいの位置まではやや膨らませ気味に、その後肩の縁に向けてやや狭め気味に編み上げである。肩の縁は、立ち上がってきたタチヘギを二本の極細のヨコヘギで捻じり合わせて二周編みである。肩は、左右両端のタチヘギ一本ずつを首の付け根に向けてやや斜め上がりに折り曲げ、その両脇の二本ずつを横に折り曲げて、二つ越し二つ潜りの網代透かし編みで編んでいる。腹と背の側の中央部と首の付け根との間の隙間にはメヅメが施されている。首は、肩の稜線として立ち上



がってきた二本のタチヘギと、腹と背から立ち上がってきた三二本のタチヘギとを、肩の縁と同様に捻じり合わせて、らっぱ状の広口に編み上げている。縁はタガに類似した編み方で、タチヘギとは別のヘギで仕上げていると思われる。腰に提げるための紐は、背の側の首の付け根の中央部に一つと、腹の側の肩の縁に二つ取り付けられたミミを通してある。また、底の縁にあたる部分にはカスガイが施され、傷まないように補強されている。ヤオ族が使用したものである。全高二三一・〇mm、肩の端の高さ一五二・〇mm、肩の横幅二九四・〇mm、口の直径一三四・〇mmである。

(19) モアン ラオス人民共和国シエイクアン県ラオ村

ラオ村は、ベトナムとの国境から七〇kmぐらい西にあり、ベトナムに流れるマツ川の上流に位置する。このモアンは、底を四角に四つ目編みにメヅメをし、X状のチカラダケをいれてソコガケしてある。胴部は、四〇本のタチヘギを方形に立ち上げ、ゴザ目編みで肩の縁まで編み上げである。左右の両側は肩の両端に向かって上開きに、腹と背の側は上に向かって狭め気味に編み上げている。肩部は、稜線を形作るタチヘギを新たに差し、左右両側のタチヘギ五本ずつを横に折り曲げて、菱四つ目編みで首の付け根に向けて斜めに編み上げている。隙間にはタチヘギと同じ幅のヘギでメヅメが施されている。首部は、残り二〇本のタチヘ

ギと新たに加えた稜線のタチヘギ二本の合計二本のタチヘギを、胴部の三分の一の幅のヨコヘギ二本で捻り合わせるように編み、ラツパ状の広口に編み上げてある。縁は、タチヘギを折り曲げてトモブチにし、口輪を当てずにその上を直接に、タチヘギと同じ幅のヘギで三回巻きに巻いて仕上げである。また、腰紐を通すミミが背の側に一つ付けられている。また、両肩の部分には、一本の細ヘギをU字形に折り曲げ、首の中間の内側から肩の突端部に向けて差し、紐が通してある。底の四隅には、節を挟んだ丸竹を割り、その一端を尖らせて、節の出っ張りで止まるまで下から差し込んだ足が取り付けられている。タイダム族が川、沼、水田などの淡水漁業に使用していたもので、腰に提て獲物を入れていた魚籠である。全高四五〇・〇mm、肩の高さ二二〇・〇mm、首の付け根の高さ二五〇・〇mm、胴部の横幅三二〇・〇mm、肩の横幅三四五・〇mm、首の付け根の横幅一六八・〇mm、口の縦径二二二・〇mm、胴部の縦径二三〇・〇mm、首の付け根の縦径一六〇・〇mm、口の縦径一八八・〇mmである。

(20) ルジュ ラオス人民共和国ボンサリー県パツカカー村

パツカカー村は、ボンサリー県随一の大河ウー川の支流ノイ川の川沿いの国道から、直登する急坂を二時間ほど上り詰めた海拔八〇〇mぐらいの所に位置する、アカ族の住む焼畑の村である。このルジュは、底を四つ目編みで方形にソコガケし、X状にチカラダケを入れて胴部を立ち上がらせている。胴部は、四五本のタチヘギを立ち上がらせ、肩の両端まで両脇を上開きに、背と腹の側はやや狭め気味にゴザ目編みで編み上げる。最初の七段は皮目のヨコヘギで、次の五段は肉だけのヨコヘギで、さらにその上三段は再び皮目のヨコヘギで編んである。肩の部分は、左側は腹の方のタチヘギ八本と背の方の六本のタチヘギとで、右側はその逆の組み合わせで、

四つ目編みで首の付け根に向けて斜め上がりに編み上げてある。首の部分は、残りのタチヘギ一七本と両側に新たに加えたタチヘギ四本合計二一本で、ほぼ円筒形に編み上げる。まず、付け根から四段はタチダケと同じ幅で肉だけのヨコヘギでゴザ目編みに編み、残り四段は細ヘギ二本でタチヘギを捻じり合わせて編み上げてある。口の仕上げは、タチヘギを捻じって折り返し同じタチヘギの筋に差し込んで仕上げている。口の内側には、筥のカエシと同じ蓋が付いている。また、両肩の稜線部と底の中央部にそれぞれミミを一つずつ取付け、肉だけの竹ヘギを通して手に提げるようにしている。全高一九四・〇mm、肩の高さ九〇・〇mm、首の付け根の高さ一七〇・〇mm、胴部の横幅一五八・〇mm、肩の横幅二四八・〇mm、首の付け根の横幅一〇四・〇mm、口の縦径一一〇・〇mm、胴部の縦径一一九・〇mm、首の付け根の縦径一〇四・〇mm、口の縦径一一〇・〇mmである。

(21) ギマウ ラオス人民共和国ボケオ県ナムチャン村

ナムチャン村は、ボケオ県の中心地ホイサイからルアンナムタに向け、定期便のトラックで三〇分ぐらい走った所で、焼畑を営むランテン族（ヤオ族の支族）の住む村である。底は、腹と背に立ち上がるヘギ三二本、側面に立ち上がるヘギ六本で、二つ越し二つ潜りの透し網代編みでソコガケしてある。その周りを五周、極細のヘギを用いて三つ越し二つ潜りの松葉編みで編んでいる。さらに、長い方向に並行に二本のチカラダケを施し、七六本のタチヘギを立ち上がらせている。左右両側は肩の両端に向けて狭め気味に、腹と背の側は最初膨らませ気味に編み、肩の線に近づくにつれて絞気味に編み上げている。肩は、左右両端のタチヘギ一本ずつを水平に折り曲げて肩の稜線とし、さらに、その両脇のタチヘギをそれぞれ八本ずつを横に折り曲げ、二つ越し二つ潜り網代透かし編みで首の付け根に

向けて水平に編んである。首は、肩の稜線から立ち上がった二本のタチヘギと腹と背から立ち上がった残りのタチヘギとを、極細の二本のヨコヘギで捻じり合わせて、三つ越し三つ潜りにラツパ状の広口に編み上げである。縁は、タチヘギを折り曲げてトモブチ仕上げにしてある。川漁に使用され、取れた魚を入れる魚籠である。全高三三・〇mm、肩の端の高さ一六七・〇mm、首の付け根の高さ一六七・〇mm、胴部の横幅二一〇・〇mm、肩の横幅一六四・〇mm、首の付け根の横幅七〇・〇mm、口の横径一一三・〇mm、胴部の縦幅三五・〇mm、首の付け根の縦幅六七・〇mm、口の縦径九一・〇mmである。

(22) クロン ラオス人民共和国ボンサリ県プンタイ村

プンタイ村は、ウー川の上流に流れ込むレー川の左岸に位置する村で、水田と焼畑による稲作を営む村である。底は、腹と背に立ち上がるヘギ一八本、側面に立ち上がるヘギ一〇本で、二つ越し二つ潜りの透かし網代編みでソコガケしてある。その周り一周を皮目の極細のヨコヘギ二本で捻じり合わせて編み、X状のチカラダケを掛けて、ソコガケしたヘギを二本一組にしてタチヘギとして二九本立ち上げて、胴部をゴザ目編みで編み上げている。両側も腹と背の側もいったん膨らませて編み、さらに肩の所にかけて狭め気味に編み上げている。肩の部分は、ゴザ目編みの最終の線でタチヘギを再び一本ずつに分けて、両脇のタチヘギ六本ずつを三〇mmぐらい立ち上がらせた所で横に折り曲げて菱四つ目編みで水平に編む。従って肩の部分は小さくなるのが特徴である。ゴザ目編みの最終線から首の付け根にかけての腹と背の部分の隙間には、幅五・〇mmのヘギでメヅメが施されている。首の部分は、一本ずつに分けられた三二本と新たに両端に一本ずつ加えた二本の合計三四本のタチヘギをゴザ

目編みでやや広口に編み上げ、縁は野田口仕上げにしてある。背の中央部分に一つ、両肩にそれぞれミミが取り付けられ、腰に結びつける紐が通してある。このクロンは、カム族がレー川や水田、池などで使用していた物で、取れた魚を入れる魚籠である。全高三一〇・〇mm、肩の端の高さ二一〇・〇mm、首の付け根の高さ二一〇・〇mm、胴部の横幅二八〇・〇mm、肩の横幅二五三・〇mm、首の付け根の横幅七〇・〇mm、口の横径一七五・〇mm、胴部の縦幅一七五・〇mm、首の付け根の縦幅一三七・〇mm、口の縦径一六七・〇mmである。

(23) びく フィリピン共和国ブラカン州サンミゲル(国立民族学博物館蔵)

底は、四つ目編みでソコガケし、タチヘギを立ち上がらせて、タチヘギと同じ幅のヨコヘギを用いて、二つ越し二つ潜りの網代編みで胴部を肩の線まで編み上げている。左右両側のタチヘギは上開きに編み上げている。肩は、両脇四本のタチヘギを横に折り曲げて、菱四つ目編みで首の付け根に向けて斜め上に編み上げている。肩の稜線には幅広のタケヘギを数枚重ねて紐で結びつけている。首は、ゴザ目編みでラツパ状に広口に編み、縁は野田口仕上げにしてある。口の内側には、筥のカエシと同じ蓋が付けられている。この魚籠はタガログ族が使用していたもので、首の部分を紐で縛って腰に提げ、水田で魚伏籠を用いて取った魚を入れるものである。全高二七〇・〇mm、肩の端の高さ一五〇・〇mm、胴部の横幅一九〇・〇mm、肩の横幅二八〇・〇mm、口の横径一五〇・〇mm、胴部の縦径一三〇・〇mmである。

(24) 魚籠 タイ王国タブカン村 (国立民族学博物館蔵)

底は、一二本と六本のヘギで四つ目編みで編んだ後メヅメをし、その周囲二周を二本の極細のヨコヘギで捻じり合わせて締め付けるように編

んである。胴部は、X状のチカラダケを当ててタチヘギを立ち上がらせてゴザ目編みで肩の付け根まで編み上げている。左右両側のタチヘギは肩に向けて上開き気味に、腹と背の側はやや膨らませ気味に編んだ後狭め気味に編み上げている。肩の部分は、左右両側のタチヘギ六本ずつを横に折り曲げ菱四つ目編みで、首の付け根に向かって斜め上がりに編んで、隙間にはメヅメが施されている。首の部分は、ゴザ目編みで上に向かってラッパ状に広口に編み上げている。縁は、野田口仕上げになっており、口の内側には、筥のカエシと同じ蓋が付けられている。背の側に竹のミミが一つ、肩の稜線に木製のミミがそれぞれ一つずつ取り付けられ、腰に提げするための紐が通されている。全高に八五・〇mm、肩の端の高さ二〇五・〇mm、首の付け根の高さ二四〇・〇mm、胴部の横幅一八〇・〇mm、肩の横幅二七〇・〇mm、口の直径一六〇・〇mm、胴部の縦幅一〇〇・〇mm、口の縦径一五〇・〇mmである。

(25) 魚籠 インドネシア共和国ジャワバラト、ボゴール (国立民族学博物館蔵)

底は、一七本と一〇本のヘギで四つ目編みでソコガケし、その周囲を一週締め付けるようにヘギで編み、五四本のタチヘギを立ち上がらせている。胴部は、アヒルの胴体と同じような船型をしている。タチヘギは、肩に向かって船先、船共に反り上がり、両舷側も上開きに四つ目編みで編み上げられている。肩は、編み上げられてきたタチヘギを野田口仕上げで縁取りし、そこから左右両側の五本ずつのタチヘギを横に折り曲げ、菱四つ目編みで首の付け根に向けて斜め上に編み上げている。首の付け根は、野田口仕上げで縁取りし、残っている三四本のタチヘギをゴザ目編みでラッパ状の広口に編み上げている。口の縁は野田口仕上げで仕上げている。口の内

側には、筥のカエシと同じ蓋が付けられている。この魚籠は、ジャワ島の西部ジャカルタに近いボゴールのスンダ族が使用していたものである。ボゴールは内陸部であることから淡水魚の漁に使用したものだと思われる。全高に一四二・〇mm、肩の端の高さ六五・〇mm、首の付け根の高さ一〇五・〇mm、胴部の横幅一二〇・〇mm、肩の横幅二一〇・〇mm、口の直径一四〇・〇mm、胴部の縦幅八〇・〇mm、口の縦径八七・〇mmである。

(26) デリ ネパール王国バグマテイ県タナフー郡バイレン、ダマウリ

(国立民族学博物館蔵)

底は、二枚を一組にしたヘギ七本と五本を用いてゴザ目編みで長方形にソコガケしてある。チカラダケは無しに二四本のタチヘギを立ち上げさせ、両側も背と腹の側も中央部でやや膨らませ気味に、肩の縁でいくぶん狭め気味にゴザ目編みで編み上げている。肩は、左右両側それぞれ三本のタチヘギを肩の稜線として水平折り曲げ、左側の腹側は、その脇のタチヘギ一本を横に折り曲げ、さらにその脇一本のタチヘギを肩の稜線を越すように折り曲げて、背の側は、脇二本のタチヘギを共に肩の稜線を越すようにし、右側は、腹側も背の側も脇のタチヘギ一本ずつを横に、さらにその脇二本のタチヘギを肩の稜線を越すように折り曲げて、菱四つ目編みに編み込んである。その結果、肩の稜線が首の付け根に向かって水平に形作られている。首は、肩の稜線から立ち上がって



きた左右三本ずつのタチヘギと、腹と背の側から立ち上がってきたそれぞれ四本ずつのタチヘギをゴザ目編みで、やや広口気味ではあるがほぼ円筒形に編み上げてある。縁は、流し止めで仕上げであり内蓋は無い。全高に二三五〇・〇mm、肩の端の高さ一四七・〇mm、首の付け根の高さ一四七・〇mm、胴部の横幅二三〇・〇mm、口の直径一一〇・〇mm、胴部の縦幅一二五・〇mmである。

以上が、現段階で確認できる代表的な資料である。もちろんこれら以外にもいくつかの報告が出されている。特に、鹿児島県内の資料に関しては、鹿児島県明治百年記念館建設調査室が、鹿児島県民俗学会に委託して行った「有形民俗資料調査」では、これら以外に一件の資料の存在が確認されている。ただ、これらは現在実物を確認することはできない状態にある。また、ラオスに関する資料については、原野芸博物館（鹿児島県大島郡住用村山間）と黎明館に収蔵されている。

それでは、ここに例示した二六例をもとにして、各部分の形態的な特質を技術的な側面から分類を試み、その関連性を考えてみたい。

3 形態的特質の分類

(1) 底

底はすべての魚籠が方形にソコガケしてあるのが特徴である。

底の編み方は、ゴザ目編み、四つ目編み、二つ越し二つ潜りの網代編み、二つ越し二つ潜りの網代透かし編みがあり、四つ目編みと二つ越し二つ潜りの網代透かし編みとは、幅広のヘギでメヅメがなされているものとそのまま透かしになっているものがあり、合計六種類の形のあることがわかる。とくに、南九州のものはメヅメが施されている形だけ

であるのが特徴であるが、これも、資料番号17の広西壮族自治区靖西県の壮族、資料番号19のラオス・シェイクアン県のタイダム族や資料番号24のタイ・タブカン村のタイ族が使用しているものなにも認められる。また、資料番号10の喜界島のものは、二つ越し二つ潜りの網代透かし編みにメヅメをしたものであり、この形は、奄美の背負い籠であるテルの底の網代編みとの関連が考えられ、奄美のものの特徴であるように思われる。こうしてみると、台湾から以南のものを見ると、二つ越し二つ潜りの網代透かし編みに幅広のヘギでメヅメを施した形以外の五つのパターンがあることがわかる。

次に、ソコガケした底の周囲を締めて固定するかのよう極細のヘギで編み締める技術を指摘してみたい。製作工程で例示した鹿児島県吹上町にはそれがはつきりと表れている。その他には、資料番号10の鹿児島市のウナギカゴに見られ、極細のヘギで三周を締め編みしてあるのが確認できる。その他の資料については、南九州及び奄美を含めて認められない。ただ、資料番号7の資料については、一五周を極細のヘギで編みあげて、その上一二周を三倍幅のヘギで編み上げ、さらにその上を極細のヘギと同幅のヘギで編み上げてあり、これもその範疇に入れて考えることも可能なものである。さらに東南アジアの資料にも吹上町のものと同様の技法が認められる。資料番号15の海南島の黎族のもの、資料番号19のラオス・シェイクアンのタイダム族のものと同野芸博物館の収蔵資料のラオス・ポンサリール県ボンタイのタイル族のものがゴザ目編みで編まれており、鹿児島のものとは一致している。ただ、資料番号13の台湾省台東県のアミ族のものは、資料番号7の鹿児島県宮之城町のものとほとんど同じ技術が取られている。しかし、東南アジアのものには、

これとは異なった形がある。それは、編み方がゴザ目編みでなく、捻じり編みで編んだもので、沖縄県立博物館収蔵の台湾のもの、資料番号21のラオス・ボケオ県のランテン族、資料番号22のラオス・ポンサリー県のカム族、資料番号23のフィリピン・ブラカン州のタガログ族、資料番号24のタイ・タブカン村のタイ族のものなどがそれである。その他にも、原野農芸博物館の収蔵資料を見ると、ラオス・ポンサリー県ポンタイのタイルー族、ベトナムのハノイのものなどにも認められる。とくに、ここで指摘しておきたいのは、ラオス・ポンサリー県ポンタイのタイルー族が、ゴザ目編み、捻じり編み、締め編みを施していない形の三類型を持っていることである。

次に、チカラダケとカスガイの掛け方について触れてみたい。先ず、チカラダケの掛け方について見てみると、X状に交叉させて掛ける方法と横長の方向の縁に並行に二本掛ける方法の二通りがある。前者には、製作工程で示した鹿児島県吹上町のものをはじめとして、資料番号1の佐賀県東与加町7、8、9の鹿児島のもものが該当する。黎明館が収蔵する資料や報告された事例を見ても南九州の場合はこの形が圧倒的に多い。しかし、喜界、奄美大島、徳之島の資料にはこれが見られないのが特徴である。また、資料番号13の台湾省台東県のアミ族、資料番号15の海南省瓊中県の黎族、資料番号18の広西壮族自治区金秀県のヤオ族、資料番号19のラオス・シェイクアン県のタイダム族、資料番号20のラオス・ポンサリー県のアカ族、資料番号22のラオス・ポンサリー県のカム族、資料番号24のタイ・タブカン村のタイ族のものに認められ、共通性を持った技術であると思われる。

一方、並行に掛けるチカラダケは、南九州では資料番号4の宮崎県椎

葉村のウテゴにみられる。東南アジアでは、資料番号21のラオス・ボケオ県のランテン族のギマウや同地に住むカム族のベンヤール、ラオス・ルアンナムタムタイルー族のモンなどに見られる。さらに、原野農芸博物館収蔵のラオス・フーパン県タイダム族のモアン、ベトナム・ハノイのもの、沖縄県立博物館収蔵の台湾のものにも同様の形が見られる。

これらのチカラダケの持つ機能は、底の補強材という働きにもまして、胴部を立ち上がらせるときの四隅の角を固定することにある。南九州からトカラ列島にかけての地域の胴部が立ち上がる背負い籠を中心とした籠の底には、ほとんど全てに見られる技術である。しかし、喜界、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島などでは、これが有る籠と無い籠との二つが混在しているが、方形首括れ広口型魚籠には見られない。これに対し、ラオス、ベトナムなどの東南アジアの地域では、方形首括れ広口型魚籠にもその他の胴部が立ち上がる籠の底にも、チカラダケが付けられているものと付けられていないものとが見られる。こうしてみると、鹿児島やトカラは全ての籠が、チカラダケを付ける方向で共通し、奄美は方形首括れ広口型魚籠に限って付けない方向で共通性をもっていることになる。この差異が何を意味するのかは明確に説明することはできない。しかし、少なくとも、胴部の立ち上がる籠作りの技術の伝播の差から来る違いではないかということは推定できよう。

チカラダケと同じく、カスガイの掛け方にも共通した形が認められる。先ず、吹上町のものと同じく底の四辺の縁に掛ける形は、資料番号4の宮崎県椎葉村のウテゴや7、8の資料以外にも始良郡吉田町、川内市、曾於郡有明町など鹿児島のものにも広く見られる。しかし、資料番号9のように付けられていないものも有り、X状のチカラダケが全てのもの

に見られたのと違いが見える。ただ、これもまたX状のチカラダケと同様に奄美諸島のものには見ることはできない。ところが、それから以南でも沖縄県立博物館収蔵の台湾のものと、資料番号18の広西壮族自治区金秀県のヤオ族の資料とに見られる。また、台湾省台東県東河郷東河村のものは、横長方向の縁に並行に二本のカスガイが施されている。しかし、現在確認できるその他の東南アジアの資料に見ることはできない。次に胴部についてみていきたい。

(2) 胴

胴部は、底からの立上りが全て横長の方形に立ち上がっているのが共通した形である。これについては、腰に着けたときにぴったりとくっついて、コロコロしないようにしたものであると伝承している。それによつて魚が傷まないという。とくに、投げ網漁に用いる場合には、そのことが極めて強く意識されている。

その編み方から見えていくと、ゴザ目編み、四つ目編み、菱四つ目編み、二つ越し二つ潜りの網代編み、二つ越し二つ潜りの網代菱透かし編み、松葉編みに分類することができる。

南九州から奄美にかけてのものは、全てがゴザ目編みだけであるのが特徴である。つまり、南九州はメヅメの四つ目編み底からゴザ目編みで立ち上り、奄美は、メヅメの二つ越し二つ潜りの網代編みからゴザ目編みで立ち上がっていることがわかる。これに対して、東南アジアのもので、南九州と同じパターンのもものは、資料番号15の海南省瓊中県の黎族、資料番号17の広西壮族自治区靖西県の壮族、資料番号19のラオス・シェイクアン県のタイダム族、原野農芸博物館のラオス・ルアンナムタ県ナムルー村ランテン族、ラオス・ルアンナムタ県ハード村モン族、ラ

オス・ボンサリー県ボンタイ村タイル族、ベトナム・ハノイのもの、資料番号24のタイ・タブカン村のタイ族のものなどである。ただ、その他にも資料番号13の台湾省台東県のアミ族、資料番号22のラオス・ボンサリー県のカム族、資料番号26ネパール・バグマテイ県タナプー郡バイレンのデリなどにも胴部にゴザ目編みが認められ、胴部の編み方としては最も広い分布を示す。

次に、二つ越し二つ潜り網代編みの底から同じ編みで立ち上がっているものに、資料番号14の台湾省花蓮県のアタヤル族のもの、また、二つ越し二つ潜り網代透かし編みの底から二つ越し二つ潜り網代編みで立ち上がっているものに、資料番号18の広西壮族自治区金秀県のヤオ族が見られる。さらに、二つ越し二つ潜り網代透かし編みの底から松葉編みで立ち上がっているものには、資料番号21のラオス・ボケオ県のランテン族のギマウ、原野農芸博物館資料のラオス・ボケオ県タイル族のモンなどがあり、網代編みあるいはその変形としての松葉編みの胴部も混じって見られるのが東南アジアの特徴であると言える。

さらに、胴部の形態で重要な問題は、底部の横の長さとして左右両肩の突端の長さの比率である。資料1から26を見てみると、底の長さに対して、肩の長さが長いもの、ほぼ同じ長さのもの、短いものに別れることがわかる。つまり、胴部の左右両脇が底から左右両肩の突端に向かって、上開きになっているもの、寸胴型になっているもの、上すばみになっているものの三種類に分類することができる。

先ず、南九州のものを見てみると、資料番号2から9まで全てのものが上開きであることを指摘できる。また奄美については資料番号10の喜界島のものや、資料番号12の徳之島のもの、名瀬市の奄美博物館の展示

資料などは上開きである。資料番号11の住用村山間のイビラクもやや胴型に近いがいくらか上開き気味になっている。ただ、資料番号1の佐賀県のは、唯一両肩が大きく狭まっているものである。これに對して、東南アジアのものも資料番号21のラオス・ボケオ県のランテン族のギマウ、資料番号22のラオス・ボンサリー県のカム族のクロン、資料番号26ネパール・バグマティ県タナプー郡バイレンのデリなどは、いずれも両脇が肩の突端に向かつて狭まって上すばみになっている。この形は、原野農芸博物館資料のラオス・ボケオ県ホイサイ村タイルー族のモンやラオス・ルアンナムタムルムル村ランテン族のものにも認められる。こうした上すばみの形を取るものは、後でも述べるが肩の作りと関係するのではないかと思われる。つまり、資料番号21と資料番号26、肩の稜線を水平に形作っており、資料番号22と原野農芸博物館の資料は、いずれも肩の部分が水平か首の付け根に向かつてやや落ち込んでいるという特徴を持っている。ただ、原野農芸博物館資料のラオス・ボンサリー県ボンタイ村タイルー族のコーンだけは、肩の稜線が斜め上がりでありながら上すばみの形になっているが、この資料は首から口縁にかけても上すばみになっているという特徴を持っているので、全体を上すばみにしようという何かの意図があったのかも知れない。

一方、腰に当たる腹の側と外側に向く背の側とは、南九州のものも東南アジアのものも、肩の突端の高さの線に向かつて上すばみになっているものが圧倒的に多い。そうした中で、資料番号11の住用村山間のイビラク、資料番号12の徳之島のアギウベラク、国立民族学博物館収蔵のラオス・シェクアン県トホン村カトウ族のもの、原野農芸博物館資料のベトナム・ハノイのものは、上開きになっている。これらの形も入れた魚

が出にくくするためのものである。以上が胴部についての分析である。次に、肩の部分についてみていきたい。

(3) 肩

肩の部分の作りこそが、この方形首括れ広口型魚籠の特徴を示すものであり、胴部を立ち上がってきた左右の腹と背の両側のタチヘギ数本を横に折り曲げて、肩を編み上げるのである。これによって、胴部の方形をそのままを保つことが可能となり、首の付け根を括れさせていると言つてよいのである。つまり、この技術こそが、これらの一連の魚籠を方形首括れ広口型たらしめているのである。

その編み形は、菱四つ目編み、メヅメの菱四つ目編み、二つ越し二つ潜り網代編み、二つ越し二つ潜り網代透し編み、メヅメの二つ越し二つ潜り網代編みに分けることができる。

最も多い編み形は、メヅメの菱四つ目編みである。この編み方は、底から胴にかけての編み方が四つ目編み・メヅメの菱四つ目編みからゴザ目編みへと立ち上がっているものとほぼ一致する。資料番号3から10の九州山地から南九州のものはこれに当てはまり、資料番号17の広西壮族自治区靖西県の壮族、資料番号19のラオス・シェクアン県のタイダム族、資料番号24のタイ・タプカン村のタイ族のものも同じである。つまり、これも環中国海域に共通して見られる形である。

また、菱四つ目編みに編んでいるものも底や胴の編み形との関係は、メヅメの菱四つ目編みの場合と同じである。資料番号2の宮崎県北川町のシタミカゴ、資料番号11の住用村山間のイビラク、資料番号12の徳之島のアギウベラク、資料番号13の台湾省台東県のアミ族、資料番号15の海南省瓊中県の黎族、資料番号20のラオス・ボンサリー県のアカ族、資



斜め上がり (資料9)

さらに、肩部の問題でも最も重要な問題は、首のつけ根に向かって延びる肩の傾斜と大きさに関することである。それを分類すると、およそ三つの型に分けられる。先ず、

水平 (資料8)

編みのものは、資料番号14の台湾省花蓮県萬榮村のアタル族のものだけであるが、この資料は底から口縁に至るまで全て同一の編み方で作られているものである。

料番号23のフィリピン・ブラカン州サンミゲールのタガログ族、資料番号25のインドネシア・ジャワバラト・ボゴールのスンダ族、資料番号26ネパール・バグマテイ県タナフー郡バイレンのデリにも見られ、東南アジアに濃厚に見られるが奄美や九州山地でも見られることがわかる。次に、二つ越し二つ潜り網代透かし編み及びメヅメの二つ越し二つ潜り網代編みについて見てみよう。先ず、二つ越し二つ潜り網代透かし編みのものは、資料番号1の佐賀県のもの、資料番号18の广西壮族自治区金秀県のヤオ族、資料番号21のラオス・ボケオ県のランテン族のギマウ、原野農芸博物館資料のラオス・ボケオ県ホイサイ村タイル族のモンやラオス・ルアンナムタ県ナムルー村ランテン族のもの、ラオス・ポンサラー県ポンタイ村タイル族のコーンなどである。佐賀県のものを除けば全てが、底から胴にかけての編み方が二つ越し二つ潜り網代透かし編み及びメヅメの二つ越し二つ潜り網代に編み編み上げられているものとは

一致する。二つ越し二つ潜り網代



斜め上がり (資料19)

のラオス・ボケオ県ホイサイ村タイル族のモンやラオス・ルアンナム

水平 (資料2)

11の住用村山間のイビラク、資料番号12の徳之島のアギウベラク、資料番号22のラオス・ポンサラー県のカ

小さな肩 (資料) 22

三番目の形が、胴部の編みの最終線から数センチ高いところでタチヘギを折り曲げて、小さな肩を作る形である。この形として、資料番号1

最も多い形が肩の稜線に当たる線が斜め上がりに首のつけ根に向かって編み上げられる形である。この形は、九州山地から南九州及び奄美大島にかけても、東南アジアにおいても基本的な形として普遍的に見られる。しかし、これとは違って肩の線が水平ないしやや落ち込み気味に延びている形が見られる。この形としては、資料番号2の宮崎県北川町のシタミカゴ、資料番号8の鹿児島県東郷町のカタフツテゴ、東郷町斧淵のイオテゴ、大口市曾木のウオトイテゴ、牧園町中津川のカタキイテゴ、資料番号21のラオス・ボケオ県のランテン族のギマウ、資料番号26ネパール・バグマテイ県タナフー郡バイレンのデリなどがそれに当たる。その他にも、原野農芸博物館資料のラオス・ボケオ県ホイサイ村タイル族のモンやラオス・ルアンナムタ県ナムルー村ランテン族のもの、ラオス・ルアンナムタ県ハード村モン族のものがあり、川内川中流域とラオス北部に多く見られる傾向がある。

タ県ナムルー村ランテン族のもの、ラオス・ボンサリー県ボンタイ村タイル族のコーン、ベトナム・ハノイ近郊のものなどがある。これも東南アジア域では、水平型と同じくラオス北部に固まって見られるという特徴がある。

以上肩の部分について見てきたが、この魚籠を決定づけている編み方、肩の傾き、小さな形の肩の何れをとつても、九州山地から南九州及び奄美にかけての地域と、東南アジアの地域とに極めて緊密なレベルの技術的な対応関係が認められることがわかる。次に、首の付け根から口縁にかけての部分、いわゆる首の特徴をみてみたい。

(4) 首

先ず、編み方についてみてみたい。首部の編み方は、ゴザ目編み、捻じり編み、捻じり編みとゴザ目編みの組み合わせ、二つ越し二つ潜りの網代編み、三つ越しの松葉編みの五種類の編み方が見られる。このうちゴザ目編みが圧倒的に多く、資料番号1から12までの九州山地から南九州及び奄美にかけての地域のもの全てがこの編み方であり、東南アジアの地域においても普遍的に見られる。

次に多いのが捻じり編みで、資料番号13の台湾省花蓮県萬榮村のアタヤル族、沖縄県立博物館収蔵の台湾のもの、資料番号19のラオス・シェイクアン県のタイダム族、資料番号21のラオス・ボケオ県のランテン族、原野農芸博物館資料のラオス・ボケオ県ホイサイ村タイル族のモンヤラオス・ルアンナムタ県ナムルー村ランテン族のものなどに見られる。

さらに、これらの二つの捻じり編みとゴザ目編みの組み合わせは、資料番号18の広西壮族自治区金秀県のヤオ族のもの、資料番号20のラオス・ボンサリー県のアカ族のもの、原野農芸博物館資料のラオス・ルアンナ

ムタ県ナムルー村ランテン族のものなどに見られる。

また、二つ越し二つ潜りの網代編みは、資料番号14の台湾省花蓮県萬榮村のアタヤル族のもの、原野農芸博物館資料のラオス・ボケオ県ホイサイ村タイル族のモンに見ることができる。

五番目の三つ越しの松葉編みは、原野農芸博物館資料のラオス・ボケオ県ホイサイ村タイル族のモンに認めることができる。

以上見てきて、とくに指摘できることは、ラオス北部のタイル族やランテン族の間には、ゴザ目編み、捻じり編み、捻じり編みとゴザ目編みの組み合わせ、三つ越しの松葉編みなどの編み方が混在して認められるということである。

それにしても、首の問題で見逃せないのが形態の問題である。つまり、肩から首の付け根にかけて括れた後、口縁に向かってラツパ状に広がって広口になっているという特徴である。この形態的特徴は、斜め上がり肩の形態とともにこの種の魚籠を規定していると言ってよい。また、広口にするための技術に今一つ注目すべきことがある。それは、肩部で横に折り曲げたタチヘギの不足を補うために、胴部から立ち上がってきたタチヘギを二つに分けて、本数を増やそうとする工夫である。

製作工程で示した吹上町の例をはじめとして、資料番号2の宮崎県北川町のシタミカゴ、資料番号4の宮崎県椎葉村のウテゴ、資料番号7の鹿児島県宮之城町のカタギイテゴ、資料番号16の中国・湖北省の漢族のもの、資料番号17の中国・広西壮族自治区靖西県の壮族、原野農芸博物館資料のラオス・ルアンナムタ県ナムルー村ランテン族のものなどにその技術が見られる。

ただ、それ以外の形が無いかというところでも無い。それは、円筒型

と名付けてもよいと思われる、首の付け根からそのまま筒状に立ち上がる形である。資料番号9の鹿児島市のウナギカゴ、資料番号6の宮崎県三股町のサカナカゴ、資料番号20のラオス・ポンサリイ県のアカ族、原野農芸博物館資料のラオス・ボケオ県ホイサイ村タイ族のもの、ラオス・ルアンナムタム県ハード村モン族のもの、資料番号26ネパール・バグマテイ県タナフー郡バイレンのデリなどをあげることができる。また、原野農芸博物館資料のラオス・ポンサリイ県ポンタイ村のタイルー族のコーンは、円筒型ではあるが上すばみになっており、広口の形とは逆になっている。これは、広口型が取った魚を入れやすくなるという機能を重視しているのに対して、円筒型は入れた魚をでにくくするということを重視していることを示しているものであると思われる。次に口の部分に触れてみたい。

(5) 口

口縁の仕上げは、巻縁仕上げ、野田口仕上げ、共縁仕上げが見られる。この中では、巻縁仕上げが圧倒的である。ただ、鹿児島事例は、製作工程で示しているように、巻縁仕上げであつてもその内側には野田口仕上げの技法が隠れているのである。もちろん、資料番号8の鹿児島県東郷町のカタフツテゴ、始良郡吉田町の思川で使用されたビク、肝属郡根占町丸峰のウテゴ、資料番号11の住用村山間のイビラク、資料番号12の徳之島のアギウベラクなどは、野田口仕上げのままになっている。巻縁仕上げにする理由として、取った魚を入れやすくなるためだということがいわれる。東南アジアの資料で野田口仕上げが見られるのは、資料番号22のラオス・ポンサリイ県のカム族のクロン、原野農芸博物館資料のラオス・ボケオ県ホイサイ村タイルー族のモン、ラオス・ポンサリイ県ポン

タイ村のタイルー族のコーン、資料番号23のフィリピン・ブラカン州サンミゲールのタガログ族のもの、資料番号25のインドネシア・ジャワバラト・ボゴールのスタダ族のもの、資料番号26ネパール・バグマテイ県タナフー郡バイレンのデリをあげることができる。

次に、中に入れた魚が外に跳び出ないように口の内側にはめこむ蓋の有無の問題がある。その形は、釜の舌(カエシ)の作りと同じものである。資料番号1から12のもので蓋のついているものは、7の宮之城町のカタギイテゴのみであるが、鹿児島県川辺町のコシテゴ、曾於郡有明町のイオカゴなどにも付けられている。東南アジアの資料では、資料番号15の海南省瓊中県の黎族、資料番号16の中国・湖北省の漢族のもの、資料番号18の広西壮族自治区金秀県のヤオ族のもの、資料番号20のラオス・ポンサリイ県のアカ族のもの、資料番号22のラオス・ポンサリイ県のカム族のクロン、原野農芸博物館資料のラオス・ボケオ県ホイサイ村タイルー族のモン、資料番号23のフィリピン・ブラカン州サンミゲールのタガログ族のもの、資料番号25のインドネシア・ジャワバラト・ボゴールのスタダ族のものなどがあるが、南九州と同様少数派である。最後に、腰に結び付ける紐の掛け方について述べてみたい。

(6) 紐の掛け方

九州山地から南九州にかけては、首の付け根に紐を巻いただけの形と首の付け根を回して左右の両肩から底を通して掛ける形の二通りがある。とくに、資料番号26ネパール・バグマテイ県タナフー郡バイレンのデリは、資料番号7の宮之城町のカタギイテゴや10の鹿児島市のウナギカゴの首の付け根を回して左右の両肩から底を通して掛ける形とほぼ同じである。奄美の場合は、肩あるいは首の付け根に四個のミミを付けて紐

を通す形になる。

一方、ラオスのものは、ヘッドバンド式背負い籠と同じく、背と両肩に付けられた三個のミミを通す形がほとんどであると言つてよい。

以上、現在確認できる資料をもとに形態的特徴について、その機能性を含めて分類を試みてみた。

4 まとめ

くどくどと資料を羅列的に並べた感があるが、結論的に言えば、九州山地が南九州及び奄美諸島にかけて見られる方形首括れ広口型魚籠の形態的特徴は、台湾以南の中国西南部から東南アジア及びネパールに至る地域、もう少し端的に言えば、東・南中国海を取り囲む周辺地域のものときつちりと対応することがわかってきた。さらに、東・南中国海を取り囲む周辺地域のものは、形態的なバリエーションがより豊かであるということが指摘できる。こうしたことは、この方形首括れ広口型魚籠



カタギイテゴと鮎漁（鹿児島県蒲生町）



魚籠と投網（ラオス：アンナムタ県モンフン村、タイラー族）

の出自がこの辺りの少数民族の人々の文化にあることを推測させるに十分である。それぞれの地域で単独に独立発生したものと考えるに、いわゆる「つながる文化」として考えることのできるものである。

考えてみると、こうした分布は、鹿児島を北限とし、そこを越えると薩摩の筑だと認識されている、バラ、ユリ・トオシと呼ばれている胴部の立ち上がらない、稲を中心とした穀物の脱穀調整をする浅底の笊や篩とも重なりをみせる。

ただ、沖永良部島、与論島から沖縄県の与那国島の地域には分布しないことが特徴であり、不思議としか言いようがないが、この分布の中に隠されている意味は、この魚籠の伝播を考える上で重要であると思われる。つまり、従来考えられている「南から黒潮に乗って島伝いに伝わってきた」という「海上の道」に新たな修正を迫る手がかりが内包されているのではないかと考えられるからである。

実は、資料の細部にわたってくどくどと取りあげたのは、ただ単に似ているというのではなく、南九州という地域内においてどのような差異があり、その地域差を環中国海という地域に広げて比較してみたときに、どういふことが見えてくるのかを確かめたかったのである。つまり、九州山地や南九州及び奄美を含めて、その地域内に認められる差異をそのままに理解し、それを「元は一つであってどれかの形から発展してきた」という周圈論的系譜論から離れて考えてみようとしたのである。例えば、肩の水平な形について言えば斜め上がりの形から変化ではなく、東南アジアの水平な肩が川内川中流域に入り込んで点々と広がり、さらに、宮崎県北部の北川町にそうした形が伝播していったのではないかとということとを推測するわけである。奄美の住用村山間や徳之島町母間の小さな肩

を持つ形も、奄美で変化したというよりも定点的にそこに伝播したと考
えられるのではないかということである。突拍子もないことのように思
われるかも知れないが、例えば、ヤオ族ないしはその支族しか持つてい
ない楔締め太鼓が、奄美諸島全体に広がりながら、沖縄にも波照間島に
しか分布しなかったり、その北のトカラ列島にも見られないのに、南房
総の千倉町と山梨県秋山村に存在することなどは、周圈論的系譜論では
説明できない⁽⁹⁾。そこに、東・南中国海を内海とする船を用いた意図的漂
着という視点と、その担い手としての少数民族の視点を取り込んでいく
ことが、きわめて有効な方法となりうると考えるのである。もちろん東・
南中国海の東の縁を北上する黒潮の流れも十分に意識しつつ、しかし、
そののみに終わらず、それを横切る動きをも意識しつつ眺める視点を大
切にしてみたいのである。そう考えることによつて、南九州はもちろん
日本の文化の多様性を豊かに描くことができると思われる。幻想的、理
想的な統一的原日本文化の追求から、多様な地域性を持つ日本の抽出へ
と視点を移したいと考えるのである。新たな文化の伝播論ないしは、
日本列島の文化の成立のありかたを構築しなければ、日本民俗学が日本
人自身を知る学足りえなくなるのではないかと考えるからである。

本稿は、その序として位置付けてみたかったのである。こうした比較
文化の指標としての民俗文化は、その他にも限りなく存在すると思われ
る。例えば、竹山の焼畑、焼米の食習俗、ムギウチダイとマツボ、バ
ラとトオシ、背負い籠と無爪のカリコの問題については、すでにその見
通しを、「ラオスの少数民族の暮らしと文化―南九州との比較から―」

（『黎明館企画特別展 海上の道―鹿児島島の文化の源流をさぐる―』鹿
児島県歴史資料センター黎明館刊 平成十年二月六日）の中で述べてお

いた。それ以外にも、丸形首括れ広口型魚籠、二つ家の民家、焼酎造り、
瓜を食べる食文化などはその代表的な問題である。次の課題として取り
組んでいきたい。

【注】

- (1) 一九九五年二月、筆者が担当して開催した鹿児島県歴史資料センター黎明館企
画特別展「鹿児島・竹の世界―環シナ海文化の視座から―」のシナリオ検討の段階
では、小野重朗先生には黎明館の専門委員としてご指導をいただいた。その過程で、
展示の方法として比較展示を試みようとする筆者に対して、先生は常に慎重で厳し
い姿勢を取り続けられたが、その先生を若干揺るがしたのが、このカタギイテゴの
分布であった。「これは、独立発生的に生まれたものではなさそうだね。一つの圏
を描くね。」と言われ、消極的ながらもシナリオを認めてくださったのであった。
そして、先生はお亡くなりになる一週間前に、自宅から黎明館に電話をしてこれら
で、「カタギイテゴを『南九州の民具』に入れなかったのは失敗だったね。」とおっ
しゃつたのであった。小野重朗先生も最晩年には、このカタギイテゴを南九州の基
本民具として認めておられたことを記しておきたい。

- (2) 同展示の解説図録『黎明館企画特別展 鹿児島・竹の世界―環シナ海文化の視座
から―』（鹿児島県歴史資料センター黎明館刊 平成七年二月一〇日）の「ビク」
の項に、本稿の大筋を示しておいた。また、一九九六年一月二日、鹿児島県民俗学
会一月例会で「カタギイテゴの作り方と分布と系譜」と題して研究発表した内容
は、方形首括れ広口型魚籠の作り方（下園氏の製作工程）を中心に、環中国海の分
布と胴部が丸い形をした丸形首括れ広口型魚籠との系譜関係について触れたもので、
本稿の下地になっている。

- (3) 筆者が、初めて下園氏を尋ねて聞き書きをしたのが一九九五年一〇月二五日であつ
た。氏は、昼間は竹細工の仕事をし、夜は町役場の夜警をしておられた。その貴重
な仕事の時間の邪魔をしながらの筆者の聞き書きに、快く、しかも懇切丁寧に対応
してくださった。その後も何回となくお訪ねし教えをいただいたのであつたが、昨
年一月にお訪ねしてみたところ、すでに前月の一〇月に亡くなっておられた。早
くに稿を起さなかった自分の怠慢を恥じるばかりである。

(4) ここにあげる資料番号(2)、(3)、(5)、(6)については、「日向の山村生産用具 資料編3」(宮崎県総合博物館刊 平成四年六月)のカードをもとに、筆者が分析的に記述したものである。

(5) 『奄美諸島・種子島・屋久島 民俗資料調査報告書』(鹿児島県明治百年記念事業事務局刊 昭和四四年三月)に、小野重朗先生が報告されたものをもとに、筆者が分析的に記述したものである。

(6) 明治百年記念館建設調査室(黎明館の前身)が、鹿児島民俗学会に委託して実施した、昭和四四年度の有形民俗資料調査で、村田(現姓牧島)知子氏が報告したカードをもとに、筆者が分析的に記述したものである。

(7) 国立民俗学博物館所蔵の資料については、黎明館企画特別展図録『黎明館企画特別展 鹿児島・竹の世界―環シナ海文化の視座から―』(鹿児島県歴史資料センター黎明館刊 平成七年二月一〇日)と同じく黎明館企画特別展図録『黎明館企画特別展 海上の道―鹿児島島の文化の源流をさぐる―』(鹿児島県歴史資料センター黎明館刊 平成一〇年二月六日)の資料解説にさらに書き加えたものである。

(8) この点についても、前掲の二書で詳しく取り上げて論じている。

(9) 小島美子「クサビ締め太鼓の分布と民俗文化の地域性」(国立歴史民俗博物館研究報告第52集 民俗の地域差と地域性? 平成五年一月)

小島氏は、「このクサビ締め太鼓のオリジナルは、中国南部から東南アジア北部にかけての少数民族の世界であろう」とし、その伝播ルートについて「日本本土に直行して南島に伝えられたのか、まず、南島に伝えられ、それが本土に伝えられたのか、あるいはその両方に別々に伝えられたのかということである。残念ながらこれについてはまだ何もいえないが、ただ稲作が日本に伝えられたと、関係があるかも知れないということは、一応考えておきたいと思っている。」として明確にしている。しかし、筆者は、ラオス・ルアンナムタム県ナムルー村(ランテン族)で、奄美と同じ一列の楔締め太鼓を、また、タイ・チェンライ県パドウア村(ヤオ族)の三列の楔締め太鼓を収集し、原野農芸博物館の山崎久勇学芸員の調査では、ラオス・フーパン県のベトナム国境のヤオ族の中に二列の楔締め太鼓の存在が確認されている。こうしたバリエーションの豊かさからして、奄美の一列楔締め太鼓の源流

が、中国西南部から東南アジア大陸北部のヤオ族系の民族にあることはまず間違いない。また、「南島には古くクサビ締め太鼓が伝えられ、それが全域に広まり、その後沖縄本土には本土から杵付き締め太鼓が、また、中国からは鉄留め太鼓が伝わり、首里王朝の影響の及ぶ範囲に従って、それが広がっていったが、奄美北部に及ばなかった。そのため奄美諸島北部でこのチヂンを独自に様式化したと考え、「一応筋が通る。」として、少なくとも南島全域に在ったものが周辺にのみ残存しているのだという、いわゆる周囲論的な理解の範囲に留まっている。しかし、クサビ締め太鼓が民間レベルで用いられているものであることを考えると、全域に広まっていたものが、沖縄本島から石垣島や与那国島にかけてのみ、みごとに消えているのはいかにも不自然としか言いようがなく、とても筋が通るとは考えにくい。もとも無かったと考えた方がむしろ筋が通るのではないかと考えられる。こうした連続せず途中が欠落する飛び石的な文化要素の集積と分析とが答えを教えてください。道につながるのではないかと思われる。

あとがき

本稿を執筆するまでには多くの方々のお教えをいただいた。とくに、製作工程の聞き書きでお世話になった下園充義氏は、昨年一〇月に世界された。また、敬愛していた小野重朗先生の生前に本稿を報告できなかったことを後悔するのみである。謹んでお二人のご冥福をお祈りしたい。

また、資料の調査、写真撮影、掲載の便宜を与えていただいた、国立民族学博物館と原野農芸博物館、長崎県立美術館には、心から感謝を申し上げたい。

